

Peace Now!21

沖縄シリーズ その1 日常と非日常の同居～沖縄の基地問題～

◆沖縄についてどんなイメージを持っていますか？◆

“沖縄”といえば、どんなことを思い浮かべますか？エメラルドグリーンの海、珊瑚礁、エイサー、ミミガー、シーサー…などなど、独特の自然や文化を思い浮かべませんか？でももう一つ、沖縄には大事な要素があります。60年前、日本で唯一地上戦が行われ、それ以来続く米軍基地との関係。自然や文化とともに、“平和”も沖縄を知る上での大事な要素なのです。

修学旅行で沖縄へ行った方もいると思いますが、最近は修学旅行の日程が短くなり、この3つの要素のうち平和学習が削られる傾向があるそうです。



◆もしも自分の大学に米軍のヘリが墜ちてきたらどうしますか？◆

2004年8月13日(金)14:15ごろ、沖縄国際大学の敷地内に米軍のヘリコプターが墜落しました。沖縄国際大学は、最近移設問題で話題の普天間基地のすぐ近くにあり、その普天間基地所属のヘリコプターが墜落したのです。

原因は、過酷な勤務で疲れていた整備士が、プロペラを留めるある部品を付け忘れたことでした。ヘリは周囲の住宅地に部品をばらまきながら高度を落としていき、ついにはこの場所に墜落しました。もう少し落ちるときの高度が低ければ住宅地に墜落していたし、高ければ授業中の大学の建物にぶつかっていました。事故当時は夏休みでしたが、集中講義やサークル活動で意外と多くの人が大学にいました。けが人が一人もいなかったのは奇跡と言えるでしょう。



現在の事故現場
右の写真の中央にある木です。



事故処理が一段落したとき

現在はヘリがぶつかった建物は取り壊され、焼け焦げた木の周りにロープが張ってあるだけになっています。

◆普天間基地移設問題って何!?◆

この墜落事故も影響していると思われるが、市街地のど真ん中にある普天間基地を違う場所へ移そうという話です。移設先の候補地は名護市辺野古(へのこ)のキャンプ・シュワブ沖合。しかし、辺野古の人々にとっては迷惑な話です。辺野古はジュゴンの生息地として知られています。現在辺野古では、「非暴力の闘い」と呼ばれる座り込み運動が続いています。



普天間基地の航空写真

街のど真ん中に基地があります。



辺野古の現在



宣野湾市
那覇市

名護市辺野古

◆自分の大学を米兵に占拠されたらどうしますか?◆

もし自分が普通に大学生活を送っている中に米軍のヘリが墜ちてきたら、と考えるとぞっとしませんか? 私たちにとっては非日常的な毎日が、沖縄に住む人々にとっては“日常”なのです。「石を投げてやろう」(地元の人談)と思うくらい大きな音を立てて飛ぶヘリコプターも、わが物顔で道路を走る米軍のトラックやバスも、みんな沖縄の日常なのです。こんな状況を、とても“平和”と呼ぶことはできません。

この背後には『日米安保』があるとされています。上の“占拠”という表現は少々オーバーかもしれませんが、ヘリ墜落事故の時も、墜落後4日間ほど米軍は現場の周囲を立入禁止にし、地元の人には何も知らせないまま事故を処理しました。



事故処理中の米兵

◆“思いやり予算”を知っていますか?◆

沖縄に駐留するアメリカ兵の光熱費、誰が払っているか知っていますか? 実は、日本の税金、つまりは日本国民が払っているのです。これは“思いやり予算”と呼ばれ、1978年に当時の金丸信防衛庁長官が「相手が困っているときは思いやりを持とう!」と言って、円高などで苦しむ米軍のために駐留経費を負担したのが始まりです。87年には特別協定が結ばれ、家族住宅の整備費、日本人従業員の給与、米軍が使う光熱費に水道代、さらに訓練移転費なども負担するようになり、2003年の負担額は2,460億円にもものぼっています。自分たちでお金を払っていないので、アメリカ兵は出かける時もエアコンをつけっぱなしにしていそうです。

雇用など経済的な面では基地に依存している沖縄。でも、これではあまりにもばかにされているような気がします…。

普天間基地の居住地域



→ 普天間基地と沖縄国際大学の間は100mくらいで、事故が起きたときすぐに100名ほどのアメリカ兵が駆けつけたそうです。

事故直後の現場



戦跡の見学に来た米軍のバス



← 米軍にとって沖縄は、激しい戦闘の後に“勝ち取った土地”という意識があり、よくこのようにして戦跡の見学に来ることがあります。

☆沖縄地名読み方クイズ! ☆

堅い話ばかりもあれなので、ここで沖縄の地名の読み方クイズをします!

- ①南風原
- ②三重城
- ③今帰仁

答えをアンケートに書いて編集部までお送りください。正解者には抽選で素敵なプレゼントを差し上げ…ましようか? 正解は、次号で発表します。

沖縄を訪れると、普段の報道では知らされない事実がたくさんあることに気付かされます。多少距離は離れていますが、同じ日本という国の中の現実なのです。ぜひとも皆さんに一度沖縄へ行ってもらいたいと思うのですが、それは無理なのでこのページで少しでも多くの人に知ってもらいたいと思います。次号も沖縄シリーズ続きます。

文責:ハムハム